ISSN 1340－5985

広島県立美術館

研究紀要

第8号

〔厳島図障屏画一覧〕補遺 …… 知念　理 1

児玉希望と水墨画（試論） …… 永井　明生 6

平成16年度美術館ネットワーク巡回展
「美術の探検！広島県ゆかりの美術展」実施報告 …… 松原　香織 50

南薫造『従軍日記』 …… 藤崎　綾 17

学校との連携事業「美術作品鑑賞授業」実施報告（2002～2004） …… 宮本真希子 1

2005

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.8

2005

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN

学校との連携事業「美術作品鑑賞授業」実施報告（2002～2004）

宮 本　真希子

1　学校と美術館を繋ぐ試み

美術文化を通じた青少年の育成は、美術館の重要な使命である。当館としても「学べる美術館」を基本運営方針のひとつの柱に据え、学校との連携を主眼とした事業運営を行ってきた。

特に近年では、学校教育と社会教育との連繋・融合により教育効果を高めようとする学社融合の流れの中で、平成14年度から順次施行された新学習指導要領でも学校教育における博物館等の活用が一層強く勧奨されている。図画工作科や美術科、美術・工芸科においても、鑑賞教育が一層重要視されるとともに、その方策のひとつとして美術館の利活用が明文化された。また、同時に「総合的な学習の時間」が導入され、学校完全週５日制が実施されるなど、児童・生徒の自発的な学習や体験活動の拡充が求められており、美術館を始めとする社会教育施設の持つ教育力に大きな期待が寄せられている。

当館では、学校との連携を推進する児童・生徒の学習支援として、所蔵作品に関するワークシートの作成、学校の教育内容を考慮した特別展の企画、各特別展での子ども向けガイドブックの作成や団体学習鑑賞会の開催、展覧会テーマに因んだ児童・生徒の作品募集と展示、日本伝統工芸展の開催に合わせて実施する出張授業（工芸作家を学校に派遣）、そして、平成14年度からは、所蔵作品展の入館料高校生以下無料化と親子を対象とするギャラリートーク、所蔵作品を学校に持ちこんで行う美術作品鑑賞授業、県内の美術館ネットワークを活用して地域の学校や家庭に美術鑑賞の機会を提供する所蔵作品巡回展などを実施し、さらに、平成15年度からは小・中学校教諭を教員長期研修員として受け入れるなど、様々な取り組みを展開してきたところである。

今回は、こうした取り組みの中で、平成14年度から３年間に渡って試験実施してきた「美術作品鑑賞授業」について、各開催校から提出された報告書を基に若干の考察を加えて報告する。これは実物の美術作品を鑑賞教材として学校に持ち込むという点で、大変実験的な試みと言うことができる。

2　「美術作品鑑賞授業」の概要

（１）趣旨

平成14年度から施行された学校完全週５日制や新学習指導要領による教育環境の変化に伴い、児童・生徒の多様な体験活動の拡充が必要とされるなかで、美術館と学校との連携の在り方を調査・研究することを目的とした。

（２）内容

学校に県立美術館の所蔵作品を持ち込み、教師と学芸員が連携して鑑賞授業を行うことにより、児童・生徒に本物の美術作品に触れ、優れた美術作品を鑑賞する喜びを体験する場を提供した。

i　実 施 校　　小・中・高等学校（障害児学校を含む）各１校

ii　実施時期　　教育ウィーク[1]（11月１日～７日）前後

iii　展示作品　　３～５点程度

iv　会　　場　　学校内の教室等

（３）流れ

年度当初に開催校を募集・決定し、その後、授業のねらい、展示作品、教師と学芸員の役割分担等を当館と開催校とで協議・調整して授業内容を具体化した。当館からは絵画・彫刻・工芸など授業の該当分野を専門とする学芸員が講師を勤め、担当教諭と共同して授業を運営した。また、開催校には授業の指導案及び報告書の作成を依頼した。

i　開催希望調査・開催校の決定…４～５月

ii　事業内容の検討・協議…６～９月

iii　事前授業・美術作品鑑賞授業の開催…10～11月

iv　授業の評価・まとめ…12～３月

3　３年間（平成14・2002年－平成16・2004年）における開催状況

（１）小学校

学校名	大竹市立栗谷小学校	本郷町立船木小学校	安浦町立三津口小学校
実施日	平成14年11月８日（金）	平成15年11月６日（木）	平成16年11月１日（月）
対　象	全校児童25人	５年生26人・６年生30人	５年生22人・６年生20人
テーマ	色々な工芸品を鑑賞する	様々な人物表現を鑑賞する	建物のある風景を鑑賞する
担当教諭	阿比留時彦	砂谷祐子	下重千香子
担当学芸員	福田浩子（工芸担当）	石川哲子（彫刻担当）	知念理（日本画担当）
展　示 作　品	河井寛次郎／呉州三色碗（陶器）、藤本能道／草白釉釉描加彩月下木乃葉ずく陶筥（磁器）、金重陶陽／備前耳付水指（陶器）、清水南山／波に龍文水瓶（金工）、金城三代一国斎／虫に蔓草高盛絵会席盆（漆工）、小林健一郎／欅丸盆（挽物）、山根寛斎／玉椿杢彩箱（指物） （計７点）	小早川篤四郎／少女全像（油彩）、鶴岡政男／帰りみち（油彩）、熊倉順吉／笑いの稽古（陶器）、八木一夫／右の目と左の目の情報（陶器）、佐藤敏／南の少女（陶器）、芥川永／おとなの影（ブロンズ） （計６点）	奥田元宋／筒石（日本画）、児玉希望／浦町の雑閑（日本画）、土田麦僊／早春図（日本画）、浜崎左髪子／スラム街（日本画） （計４点）

[1] 11月1日が全国の都道府県で現在の教育委員会制度が創設された節目の日に当たることから、広島県では平成13年度から11月１日を「ひろしま教育の日」と定め、11月１日から７日までの１週間は「ひろしま教育ウィーク」として教育に対する県民の意識を高めるための多彩な行事を開催している。

（2）中学校

学校名	世羅町立世羅中学校	廿日市市立廿日市中学校	東城町立小奴可中学校
実施日	平成14年10月28日（月）	平成15年11月11日（火）	平成16年11月５日（金）
対　象	２年生３クラス100人	３年生４クラス138人	１～３年生40人
テーマ	現代絵画を鑑賞する	風景画を鑑賞する	様々な風景画を鑑賞する
担当教諭	石原詠子（美術科担当）	多賀谷より子（美術科担当）	若林早苗（美術科担当）
担当学芸員	角田　新（洋画担当）	角田　新（洋画担当）	角田　新（洋画担当）
展　示 作　品	名井萬亀 作 静物画／数寄屋橋／原爆／ビキニの灰／憩い／無明／宮古市浄土ケ浜 （油彩画・計７点）	小林千古／広島の川（パステル）、檜山武夫／プラットホーム（油彩）、灰谷正夫／砂（油彩）、寺田政明／二つの道（油彩）、金光松美／Mt. Whitney（アクリル） （計５点）	太田忠／雪景（油彩）、小林和作／山湖の秋（油彩）、小林和作／白馬山下の春（油彩）、中川一政／福浦風景（油彩）、森谷南人子／伯耆大山暮秋（日本画） （計５点）

（3）高等学校等

学校名	広島県立自彊高等学校	芸北町立芸北中学校／県立加計高等学校芸北分校（連携型中高一貫教育校）[2]	広島県立三次高等学校
実施日	平成14年11月14日（木）	平成15年10月28日（火）	平成16年12月9日（木）
対　象	３年生絵画・クラフト選択22人	中学１年生24人／高校１年生選択美術10人	２年生美術選択37人
テーマ	自画像と風景画を鑑賞する	不思議な絵を鑑賞する	バウハウスのデザインを学ぶ
担当教諭	原仲裕三（美術・工芸科担当）	品川知枝（美術科担当）	國木祐二（美術・工芸科担当）
担当学芸員	藤崎　綾（洋画担当）	藤崎　綾（洋画担当）	松田　弘（西洋美術担当）
展　示 作　品	檜山武夫 作 自画像／自画像（黄色い）／プラットホーム／陸橋 （油彩画・計４点）	土屋幸夫／果てしなき餐食、山路商／犬とかたつむり、桂ゆき／土、寺田政明／生と死の凝視 （油彩画・計４点）	バウハウス関連資料 オスカー・シュレンマー創作バレエ復元ビデオ、ヴァルター・グロピウス設計バウハウス復元ビデオ，デザイン製品（玩具等） （計６点）

4　鑑賞授業の詳細

（1）テーマ・展示作品の設定

授業のテーマや展示作品は、各学校の教育ニーズをベースに当館がその趣旨を汲み取りながら所蔵作品の現状に沿った実現可能なプランを提案し、協議・調整を重ねて決定した。その際、地元ゆかりの優れた美術作品の紹介と教材としての有効活用に努めた。以下に各学校でのテー

[2] 芸北中学校と加計高校芸北分校は連携型中高一貫校の県内における先進校で、今回、美術科としての初の中高合同授業を試みた。

マを紹介する。

① 地域に取材した題材

・ 大竹市立栗谷小学校は、県境に位置する僻地小規模校で、自然豊かな生活環境と３世代・４世代の家族構成の中、ものづくりの伝統が息づいており、そうした伝統の継承・発展を期待して、工芸作品を鑑賞教材とした。その際、様々な材質・技術と宮島細工等地元伝統工芸の紹介に配慮した。

・ 廿日市市立廿日市中学校では、地元出身の洋画家・小林千古[3]が描いた身近な郷土の風景画を導入として、身近な風景から心象風景まで、具象表現から抽象表現まで、様々な表現方法による風景画を鑑賞することにより、鑑賞体験を広げていった。

・ 東城町立小奴可中学校では、県北（郷土）の風景を描く表現活動と併せて、県北の風景に惹かれ、ゆかりのあった画家たち[4]の風景画を中心に鑑賞することにより、故郷の良さや美しさを再認識するとともに、風景画の多様な表現を鑑賞し、そこに表された作者の心情に思いをはせた。

② 教育カリキュラムに沿った題材

・ 世羅町立世羅中学校では、事前に制作したシュールレアリスムの手法による想像の絵に関連付け、次学年で学習するダリやピカソなど現代絵画の鑑賞への布石とするため、授業のテーマを現代絵画とした。展示作品は、超現実主義から抽象表現まで現代美術の諸様式を試みた広島市出身の画家・名井萬亀[5]の作品を教材として活用した。

・ 県立三次高等学校では、３学期に学習するデザインへの導入として、現代デザインの原点となったバウハウスの造形をレクチャーと作品鑑賞及びワークショップ（バウハウス製品の積木による造形実習とメールアート（年賀状）制作）を通して体験し、生活の中にあるデザインの機能性や美しさへの関心を喚起した。

③ 表現活動に関連させた題材

・ 県立自彊高等学校では、自画像の制作に合わせて自画像作品を鑑賞した。展示作品は、広島市出身の画家・檜山武夫[6]の自画像２点で、併せて同画家の風景画２点の展示を提案し、自画像の厳しい自己表現と風景画の愛情ある暖かい心情表現の対比を試みた。

・ 本郷町立船木小学校では、６年生の自画像制作と５年生の人型をモチーフとする共同制作に先駆けて、「人」という共通テーマを様々な様式、技法、素材で表現した作品を

---

[3] 明治３・1870年現在の広島県廿日市市に生まれる。明治21年渡米。明治24年カリフォルニア州立大学付属マーク・ホプキンス美術学校入学、明治30年同校卒業。明治31年一時帰国後、ハワイを経てヨーロッパへ。明治36年帰国し、明治39年黒田清耀とともに学習院女学部講師、翌年助教授に。明治44年故郷廿日市市地御前で病没。41歳。

[4] 昭和21・1946年に小林和作・森谷南人子らが東城町比婆山に１週間滞在して制作したり、昭和26年第２回近県写生大会（比婆郡西城町主催）で小林和作・太田忠らが審査員を務めたなどのエピソードがある。

[5] 明治29・1896年広島市に生まれる。大正14・1925年渡仏。昭和11・1936年東京上野の日本美術協会列品館で個展を開催。昭和20・1945年広島に疎開させていた作品を原爆で失う。二科会会員となるが、昭和24年からは読売アンデパンダン展を中心に活動。昭和51年東京の自宅で死去。80歳。

[6] 明治39・1906年広島市に生まれる。県立広島工業学校を卒業後、江田島（広島市の南西7.5kmにある島）で小学校教員を務める。大正14・1925年広島機関庫に入所。機関士として働きながら、制作。全関西展、二科展などに出品。広島洋画協会の設立に参加、会員に。昭和７・1932年没。26歳。

鑑賞することにより、児童が自由で新しい表現を開拓していくことを期待した。

・　安浦町立三津口小学校では、「建物のある風景」というどこにでもある身近な題材をとりあげ、建物の形や構図のおもしろさなどそれぞれの作品の特徴を見つけながら作品を鑑賞し、１枚の画面に切り取った風景の中で作者は何を表現したかったのかを想像して鑑賞する楽しさを体験するとともに、児童自身の感性を引き出し、自分も表現してみたいという意欲に繋げることを企図した。

④　生徒の興味・関心に沿った題材

・　連携型中高一貫教育校である芸北町立芸北中学校と県立加計高等学校芸北分校では、事前の生徒アンケートで、空想・幻想など心の世界を表現した作品、写実的・具象的表現に人気が集中したことから、「作品との出合い」を感動的・効果的に演出するために、生徒の興味・関心を惹くと予想されるシュールレアリスムの手法で描かれた作品を選定した。

（２）学習のねらい

鑑賞授業の実施に当たって、各実施校でそれぞれの教育目的や発達段階等に沿った学習のねらいが設定された。概ね学習指導要領等の基本に沿ったもので、次のような項目に要約できる。

ⅰ　本物の美術作品の大きさ、色彩、素材、表現・技法の細部、筆致、作家の手の跡などを間近に観察し、実物ならではの魅力や迫力、作品毎の個性や表現の多様性を体感する。

ⅱ　感性や想像力を働かせて、作者の心情や制作意図を感じたり考えたりすることにより、作品を鑑賞する能力を深める。また、それらを自己の在り方・生き方に重ね合わせ、作品鑑賞を通して自己を見つめる契機とする。

ⅲ　鑑賞を通して、自分なりの考えや意見・価値観を持ち、主体的に考えようとする態度を育て、自分の考えを言葉や文章で表現できるようにする。

ⅳ　自分の考えを表現し、他者の意見を聞いて交流することにより、共感するとともに自他の価値観の相異を理解・受容し、個性を尊重する態度を養う。そうした過程を経て、視野を広め、思考を深めつつ、柔軟な思考力や想像力を培う。

ⅴ　児童・生徒の興味・関心を喚起して将来に向けての鑑賞意欲の継続や増大に繋がるよう、生涯学習を視野に入れた美術館や美術作品との出会いとする。

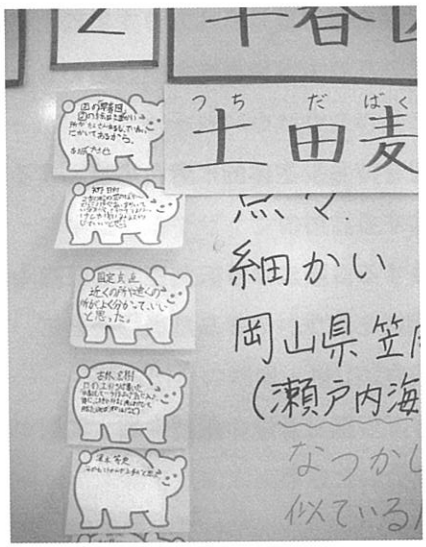
（３）授業の進め方

指導案の作成や事前・事後の指導、授業の評価などを実施校に依頼し、単発的なイヴェントとしてではなく、学習の一連の流れの中に位置付け、効果的に鑑賞授業が活かされることを期待した。“講師と児童との橋渡しをし、講師・作品・友達同士との対話をよりよく図るための手だてを講ずることが教師の役割であり、セルフガイドなどで前もって期待感・自分なりの観点を抱かせて主体的な鑑賞を導くことが大切”（栗谷小学校報告書）という認識の下で、学校及び教師の積極的な参画があって初めて鑑賞授業が生きてくる。

鑑賞授業への導入や動機付けのために、各学校において事前授業が行われた。事前授業の内

容は、関連する作品の制作、他の鑑賞教材（教科書、資料集、図版等）による鑑賞指導、美術館についての調べ学習、当日鑑賞する当館の所蔵作品に関する課題学習（教師作成のワークシート等に沿って、作品の題名を予想する、作品の一部を隠して描かれているモチーフを予想する、作品についての質問を考える）など各学校で様々に考案され、鑑賞授業に向けての期待感が醸成された。

本物の作品を持ちこんで行う鑑賞授業当日は、担当教諭が司会を勤め、学芸員と児童・生徒とを仲介して対話を活性化させるなど授業の雰囲気づくりや進行調整を行い、その枠組みの中で学芸員が児童・生徒と対話をしながら作品鑑賞を進めていった。その際、担当教諭が作成した鑑賞ノートが児童・生徒の鑑賞の視点を導き、考えをまとめて発言しやすくするためのツールとして活用されることが多かった。鑑賞ノートでは、一番好きな作品と選んだ理由、作品の第一印象、何が描かれているか、色や形について、気になったところ、作者の気持ち、学芸員への質問、授業の感想などを児童・生徒に問いかけている。また、好きな作品・気になる作品の第一印象を付箋に記入して掲示し、対話のきっかけ、自分自身の考えのまとめや振り返り、他の児童・生徒の印象・感想との比較などに活用するケースもあった。学芸員からは、自由で個性豊かな発言を促し、児童・生徒との対話を主軸にしながら、作者の生き方や人となり、制作の背景、自身の作品解釈、技法・材質、保存技術、額装の素材や方法など、児童・生徒の興味・関心に応えながら、様々な視点から解説を行った。



児童の第一印象を記入した付箋を掲示。対話の流れにそって教師がそれらを要約・反芻し、児童が考えをまとめる手助けをする。（三津口小学校）

三津口小学校での授業風景。多目的ホールを鑑賞空間として設える。学芸員と教師によるティームティーチング。

対象となる児童・生徒は１回の授業につき概ね40人を上限とし、学校の規模や教育方針によって、異年齢混合の合同授業としたり、学級・学年別に授業を行うなどした。また、会場は学校内の施設とし、美術教室などが使われたが、図書室や視聴覚教室などを活用して、学校内美術館のような特別な鑑賞専用の空間を設える工夫もあった。

事後指導としては、授業効果の定着を期待して感想文や関連する作品の制作、アンケートに

よる児童・生徒の意識の変化や授業効果に関する調査などが行われた。

以下に開催校における鑑賞授業に関連する指導の流れを２例紹介する。

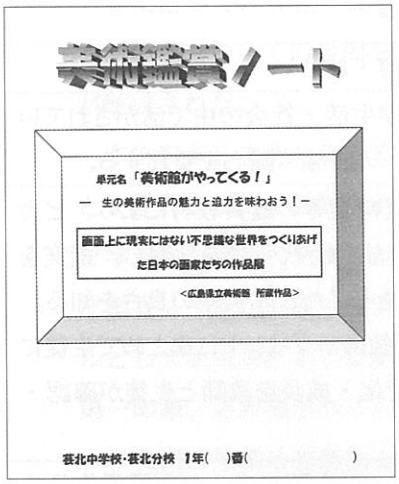
【指導事例１：廿日市市立廿日市中学校『風景画を鑑賞する』】

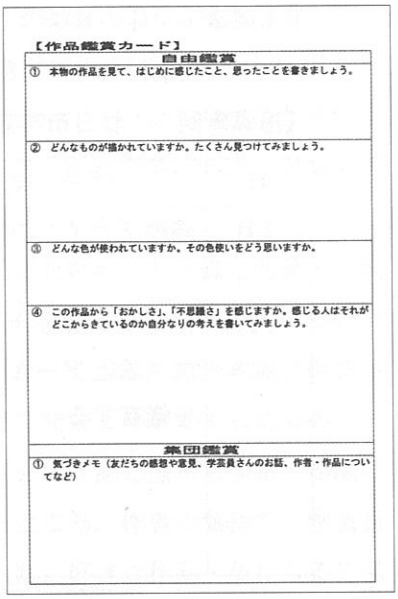
月	テーマ	内容・ねらい
４月	商標デザインの鑑賞	身近なデザインから美術が生活・社会の中で活かされていることを学び、美術鑑賞への興味・関心を喚起する。
９月	ピカソ／ゴッホ／ジャポニスムとアールヌーボーを鑑賞する	ＶＴＲ・教科書・美術資料集等の鑑賞教材により、ピカソやゴッホの人生とその作品、時代背景を学習し、鑑賞を深め、欧米に大きな影響を与えた日本美術の良さを知る。鑑賞毎に生徒の感想文を教師がプリントにまとめて生徒に返すことにより、生徒の変化・成長を教師と生徒が確認・共有しながら進める。
10月	県立美術館／鑑賞作品／小林千古について学ぶ	郷土画家・小林千古のＶＴＲを鑑賞するなど鑑賞作品や作家について予備知識を得、美術館や学芸員の役割、県立美術館について学習することで、授業に備える。
11月	当館所蔵作品による鑑賞授業	事前学習の成果（鑑賞作品・美術館に関する予備知識や、ピカソ作品などによる鑑賞学習のトレーニング）を生かして、ワークシートや学芸員との対話により、本物の美術作品を鑑賞する。
１月	生徒アンケートの実施	鑑賞授業の効果、生徒意識の変容を調査する。

【指導事例２：芸北町立芸北中学校／県立加計高等学校芸北分校『不思議な絵を鑑賞する』】

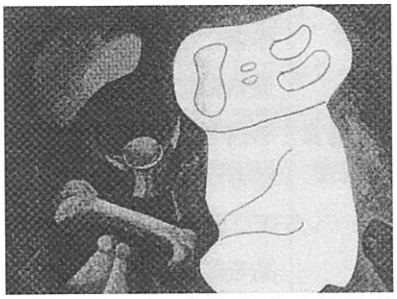
月日	テーマ	内容・ねらい
10／７	美術館について調べる	パンフレットやインターネット、その他資料により美術館や県立美術館について調べ、レポートを作成する。
10／14	ダリ作「ヴィーナスの夢」を鑑賞する	当館所蔵作品で今回の学習テーマとなるシュールレアリスムを代表する画家ダリの「ヴィーナスの夢」を図版により鑑賞する。当日と同様の鑑賞ノートを使い、作品を総合的・分析的（初発の感想から造形要素へ）に鑑賞するトレーニングとする。
10／21	鑑賞作品の一部を白抜きにしたワークシート	当日鑑賞する作品のモノクロ図版の一部を空白にし、空白部分を題名や回りのモチーフから生徒が予想して描きこみ、絵を完成させることで、想像力・興味・関心を高める。
10／28	当館所蔵作品による鑑賞授業	生徒の予想図を紹介した後、本物との対面。１人１人が鑑賞ノートに沿って自由鑑賞した後、集団鑑賞を行い、学芸員との対話や意見交流により鑑賞を深める。
11／７	授業のふりかえり	鑑賞ノートや図版をもとに、一連の授業をふりかえって感想を書く。

芸北中・県立加計高校芸北分校作成の鑑賞ノート抜粋。鑑賞作品の一部を白抜きとし、題名や周囲のモチーフから何が描かれているか事前に予想することにより、作品との出会いを印象深く演出。また、作品鑑賞に当たっては総合的・分析的な鑑賞へ導く発問が工夫されている。





鑑賞作品のひとつ寺田政明作「生と死の凝視」のフクロウの部分を白抜きにして事前に提示



左のフクロウの部分（白抜き部分）について何が描かれているか事前に生徒が予想した図の作例

（4）授業を終えて

① 鑑賞の対象となる作品について

鑑賞の対象となる作品については、比較鑑賞により作品の特徴をつかみ易くし、鑑賞体験の幅を広げるために多様な表現の作品を選定するよう配慮した。また、当館が所蔵する本県ゆかりの画家である名井萬亀や檜山武夫の作品が、鑑賞教材として効果的に活用されたことは、当館ならではの特色が生かされ、郷土の芸術家に対する関心を高める上でも有意義であったと思う。

小学校高学年から高校生にいたる各年齢とも、写実的な表現、本物そっくりの表現、細かく丁寧な表現、美しい材質や色彩などが人気を集めたが、全くの抽象でも具象でもなく、考えるヒントがあって想像を膨らませることができるような作品も児童・生徒の興味・関心を惹き、見て楽しく感情移入できるものと推察された。

例えば、芸北中学校／加計高等学校芸北分校での「見たい作品」についての事前アンケートでは質問項目８項目[7]のうち「空想・幻想画」「具象・写実的な絵」がそれぞれ１位・

[7] どんな作品が見たいかという質問に対して、鑑賞授業の対象となる生徒【中学１年生24人（男子20人、女子４人）、高校１年生選

３位に選ばれ、廿日市中学校では「砂」（灰谷正夫 作）が“リアルに描いてあるのに不思議”、「二つの道」（寺田政明 作）が“どちらに進もうか迷っている気持ちが出ている”と、小奴可中学校では「雪景」（太田忠 作）が“原色がたくさん厚塗りしてあって雪景色なのにたくさんの色が使われていているのが不思議だった”“雪は白いというイメージがあるけど、赤や青などいろいろな色が使ってあっても雪景色だとわかるのはその人独自の色づかいやその人の想いがつまっているからだと思いました”と生徒の心を捉えた。船木小学校では「帰りみち」（鶴岡政男 作）や「笑いの稽古」（熊倉順吉 作）、「南の少女」（佐藤敏 作）が“見ていると不思議に思えてくる”“たくさんの考えが出てきておもしろい”と児童の人気が高く、三津口小学校では「スラム街」（浜崎左髪子 作）に“初め何の絵か分からなかったけど、よーく見てみると屋根だったというちょっと不思議な所が良い”と関心を寄せる児童がいた。

また、小奴可中学校で展示した唯一の日本画「伯耆大山暮秋」（森谷南人子 作）に“全体的にやさしく明るい感じ”“全体的にいろがやさしい感じでふわっとした色だなぁと思いました。田舎っぽい風景が描いてあってこの周りの風景に似ているなぁと思いました”“ほんわかした感じのきれいな絵と思いました”と最も多くの生徒が魅力を感じ、三津口小学校では「早春図」（土田麦僊 作、掛軸）に、緻密な点描表現や縦長構図による遠近感のほかに“和風で落ちついた感じがいい”“なんかあったかい昔の日本みたいな感じで良かった”“安浦（小学校所在地）の風景となんとなく似ているから”“ほんわか暖かい”という理由で人気が集まり、穏やかな日本画表現を身近に感じ共感を抱く傾向があった。

② 実物の美術作品を鑑賞したことについて

事前学習で参照した作品図版～モノクロ図版で大きさ等の表示がなかったり、作品名や作品の一部が隠されていたり、情報を制限して提示された場合が多い～による予想と本物との色や大きさの違い、存在感や材質感、その他本物の作品の持つ迫力に感銘を受けたようだった。

児童・生徒たちは、

「本物の作品はすごく迫力があった。遠くから見るより近くから見た方がどんな色を使っているのかとか、たくさん重ね塗りがしてあるとかいうのがわかった。」（加計高等学校芸北分校）

「ぬり方でもそれぞれの作品によって違っていた。」（芸北中学校）

「絵は本や資料で見るのと比べると、実際に見るのとではぜんぜん違った。細やかなところや色づかいなど、作者の思いがより伝わってきた。なるべくその絵のよさを見つけようといった感じに見方が変わった。」（廿日市中学校）

択美術専攻者10人（男子５人、女子５人）】は次のとおり回答（複数回答可）。人物画：３人、風景画：11人、静物画：１人、植物画：２人、空想・幻想画：18人、具象・写実的な絵：10人、抽象的な絵：１人、その他：なんでもよい・デッサン。

「近くで見たら、たくさんの色がすごく重なっていました。」「よく見てみると、ふでの先をいかして描いてあったのですごいと思いました。」「たてぬりやよこぬりでぬってあったりななめでぬっていたりするのはなぜかと思います。」（小奴可中学校）

「写真で見るよりも、実物の大きさも確かめられるし、本当によかったです。」「作品を見る前、写真に、自分で色をつけてみました。ぜんぜんちがう色だったので、こんな色だったんだと思いました。」「写真ではでこぼこはよく分からなかったけど、実物だとよく分かった。」（船木小学校）

などの感想を寄せ、

「大きな筆で力強く描いている。近くから見ただけでは荒いだけに見えるが、遠くから見ると奥の山に雪が残り、川の流れがよくわかる。」「色のぬり方がパレットに出したチューブの色をそのままフデでベタぬりをしているように見えたけど、はなれて見ると、ベタぬりではなくとてもきれいにぬれているように見えてビックリした。」「近くで見ると存在感ある絵だけど、遠くから見るとほのぼのとした絵になるので不思議に思った。」（小奴可中学校）

と近寄ったり離れたりしながらその視覚効果を体験していた。

また、三津口小学校では、事前のアンケートで約40％の児童が鑑賞活動が「あまり好きでない」「きらい」と答えたが、鑑賞授業の自己評価では「積極的に美術作品をみることができましたか」という問いに対し、100％の児童が「できた」と答えている。このことについて、担当教諭は「教材として本物の美術作品が運び込まれ、学芸員から作品の見方や解説を聞くことにより、鑑賞意欲が高まったものと考えられる。」と分析している。

③ **鑑賞授業での児童・生徒の反応**

この鑑賞授業は児童・生徒に好評で、小学校では児童の積極的な発言による意欲的な参加があり、中学校・高等学校では、受動的ながらも学芸員の解説に興味を持って耳を傾ける姿が見られた。参加した大多数の児童・生徒が楽しかったという感想を述べている。

まず、本物の芸術作品と対峙することでするどい観察力を発揮する児童・生徒があり、

「私はこの絵で全体的にぼかしがきいていてやわらかいところが気に入りました。あと、絵に線がなくて直接絵の具で描いているところも気に入りました。」（三津口小学校）

と、児玉希望の西洋画法を取り入れた日本画「浦町の雑閙」について、その特徴を的確に捉えた発言をしている。

学芸員の解説については、

「学芸員の方の見えたものや思ったことが聞けたり、色とかについて話をしてもらってよかった。その絵の深いところまで見れた。」「本物を見て色々な事に気がついた。学芸員さんの話で色々わかってよかった。今まで作品をじっくり見たりしてなかったので色々な発見があってよかった。」（芸北中学校）

「絵を描くのが苦手なので、前は『絵とかなくていい』と思っていたけど、授業で本物の絵を見たり、画家についての話を聞いて感動した。絵は見る人の気持ちまでも変えてしまうんだなと思った。」（廿日市中学校）

「分かりやすい説明でとてもよく分かったし、ただ自分が絵をみるよりもいろんな事がわかった。」「とても分かりやすく説明してくれてありがとうございました。やっぱり説明してもらえると興味がもてます。」（世羅中学校）

との感想で、学芸員の解説から、作者の人生や作品の中のメッセージ、表現するための様々な工夫を知ることができ、それによって感動し、鑑賞を深めることができ、そうした体験を楽しみ、喜んでいた。

また、学芸員との対話を軸に、集団で意見交換しながら作品鑑賞をしたことについて、

「自分が見えたもの以外のものが人は見れてて、それが自分も見つけられたのがよかった。」（芸北中学校）

「ひとつの絵でも見る人によって、見方も感じ方も違うと思います。その中でみんなの感想を聞いて、共感できることがたくさんありました。どの絵もちゃんと一つ一つに良さがありました。」（廿日市中学校）

といった感想があり、芸北中学校と加計高等学校芸北分校の合同授業では、

「（先輩の）意見がやっぱりすごかった。」（中学生）

「中学生はみんないい感性をもっているなぁと思った。」（高校生）

と異年齢間で相互に刺激となったようだ。船木小学校での作品の題名当てクイズでも、

「題のあてあいこがおもしろかったです。」

「はじめに、自分で題を決めていて、後でみんなの考えた題を聞くとおもしろい題がいっぱいありました。楽しかったです。」

と、児童は自分の意見を述べ、他の児童の意見を聞くことを大変楽しんでいた。

芥川 永 作「おとなの影」（ブロンズ）

【左の作品に対する題名当てクイズ】
（船木小学校・回答例とその理由）

5年生：影男（寂しい感じ）
本当は兎（影が兎の形）
伸びる影
平和に生きたい（顔が悲しそう）
平和に向かって（前に向かって歩いているように見える）
明日に向かって（足を踏み出して動いているように見える）
※作者の原爆・平和をテーマにした制作活動について事前情報有り。

6年生：迷う影（親を探す子どものよう）
人と影・影・浮き出る影・黒い影（普通は人は作っても影は作らないから）

作品を鑑賞する課程で意見・感想を述べ合うことで、互いに共感したり、価値観の違いや多様性を知り、個性を尊重したり、ものの見方を広げたり深めたりしていった様子が伺える。

また、三次高等学校では、レクチャーと作品鑑賞に併せてバウハウス製品の積木による造形実習を生徒が参加する場面として設けたが、

「積木を使って表現するのは楽しかったです。色使いや形をどうつかうかと悩むところもおもしろいと思う。」

「造形実習では、自分の表現したいことや、伝えたいことが自由につくってあったのが良かったです。自分で考えつかないようなことを皆いっぱいやっていてすごいなと思いました。」

「ただの積木なのに置き方だけでいろんな意味を持つ作品ができた。」

と自然にデザイン・マインド（デザイン表現の持つメッセージ性や造形の単純化・抽象性・象徴性、色彩と形のコンポジションなど）に導入され、後日の課題であるメールアート（年賀状）制作ではオリジナルのタイポグラフィに取り組む生徒もあった。

三次高等学校でのバウハウス製積木によるワークショップ

三次高等学校２年福永理絵さんによる手の平をデザイン化したタイポグラフィ

④ 鑑賞授業の効果、児童・生徒の変化

開催校で実施されたアンケート調査によると、船木小学校では、美術館に行ったことがある児童、芸術作品を鑑賞したことがある児童は対象児童56名のうち30％以下の少数派だったが、授業後はほぼ全員の児童が作品を見て楽しかった、もっと芸術作品を見たい、美術館に行ってみたいと答えており、鑑賞授業が児童の美術作品や美術館への興味・関心を高めている。

芸北中学校／加計高等学校芸北分校では、鑑賞授業を体験することによって、鑑賞が好

きと答えた生徒は62％から76％に増加し、美術作品に対する見方に変化があったと答えた生徒が67％、以前より美術館への興味・関心が増したと応えた生徒が70％にのぼった。

廿日市中学校で３年生136名（男子64名、女子72名）を対象に実施した意識調査では、４月の時点で、

①美術が好きですか？　【好き：９名、嫌い：45名、どちらでもない：82名】
②美術は生きていく上で必要ですか？
【必要：３名、不必要：81名、分からない：52名】

という調査結果だったものが、鑑賞授業後に実施したアンケートでは、

以前より美術や絵画鑑賞に関心が高くなりましたか？
【はい：105名、いいえ：９名】

と答えるほどに、変容している。

生徒たちの言葉を拾ってみると、

「これまでは、絵を見るとき、描いた人の気持なんて考えたことがなかった」

（自彊高等学校）

「今まで絵をなんとなく見ていたけど作者の気持ちとか想像してみるようになった。それに前より美術館に行ってみたいという気持ちが強くなった。」

「今まで絵なんて簡単だと思い絵に興味はなかったが、今はもっと芸術家の作品をみたいと思うようになった。」

「前より絵に描かれてある色やものを気にしてみるようになった。」

「近頃家にかけてある絵をよく見るようになった。」

（芸北中学校／加計高等学校加計分校）

「僕は名画鑑賞の授業の前に、何回か美術館に行ったことがある。でもよく分からなかったから、おもしろくなかった。だから絵を見たいとは思わなくなっていた。しかし、この授業を受けて、絵には作者の心境やメッセージが込められているということを知った。それからは、もっとたくさんの絵を見たいと思うようになった。」

「今まで絵なんかしょうもないと思っていたけど、一つ一つの絵に画家のさまざまな思いがあることを知って、あらためて真剣に見てみると一つ一つの絵が何か語りかけてくるような気がした。」

「ＣＤケースに入っている歌詞カードひとつにしても『どうしてこういう絵を描いたんだろう』とか、少し考えるようになりました。」

「美術館に行くことはめったにないけど、絵を美術館に見に行きたくなった。」

「かたくるしいものではないかと思っていましたが、もっと気軽に鑑賞できるのかなと感じるようになりました。」

（廿日市中学校）

などと感想を述べており、美術作品を見て楽しいと感じ、身近な美術作品を楽しむ態度が育成されたり、鑑賞力が深まり、さらに幅広い作品鑑賞や美術館訪問への意欲が喚起されたりしている。

5　3年間の試行をふりかえって

本物の美術作品を持ちこむ出張授業は、全国的にも数少ない試みである。他に代替物のない大切な所蔵作品を学校での授業のために搬送・展示することは保存上好ましくなく、様々なリスクや労力が伴い、汎用性のある手法とは言えない。また、授業のために持ち出せる作品も展示環境や、作品の物理的特性やコンディションによって限られてくる。

しかし、美術館の外へ出て、学校へ出向き、教師と学芸員が共同で授業を作り上げたことは、双方の理解を深め、美術館と学校とを繋ぐひとつの手法として大きな効果があった。教師から提案された授業進行における留意事項は当館が児童・生徒を対象とする教育普及活動を進める上でも大変参考になるものであるし[8]、教材という視点から当館所蔵品の有用性を見直したり、事前・事後の指導を含めた教育の流れの中に位置付けられたことによって生徒の変容など学習効果の測定等ある程度のスパンをもった事業の評価が可能になるなど、美術館の中にいたのでは得られない多くの知見を得ることができた。

また、インターネットなどの情報通信技術の発達により世界中の大量の美術情報にたやすく接することができるが、本物の美術作品には代替できない魅力がある。バーチャルでお手軽な情報があふれる反面、リアルで生き生きとしたずっしりと心に残る体験は減少しつつある。こうした状況で、本物の美術作品を鑑賞することによる感動体験というのは、現在の教育において強く求められていると思われる[9]。

鑑賞授業はゲスト・ティーチャーである学芸員と本物の美術作品という適度の緊張感と、学校という親密な空間の中で実施され、ほとんどの児童・生徒が美術作品と初めてじっくりと向かい合った。本物の美術作品の持つ存在感と迫力、学芸員の持つ専門的な視点などが新鮮な刺激となり、美術作品の鑑賞という体験を児童・生徒に強く印象づけたものと思われる。また、各校の学習の流れや目的に添ってテーマをしぼって作品を選んだこと、工芸作品の鑑賞で、作品の内側や底、外箱の箱書きに至るまで丸ごと鑑賞する機会を提供したことなどは、美術館における通常の展示ではできないことで、こうした側面も効果を増大させた要因と考えられる。美術館の持つ資源・財産～作品と人材～が学校という場で十分生かされたと評価できる。また、作品を携えて学校に赴いたことから作品の見方ばかりでなく美術を仕事とする人々（作家、学芸員、美術品輸送業者等）と関わることができ様々な職業や生き方を知り、携わる人々が作品を慎重に扱う様子を

---

[8] 例えば三津口小学校での担当教諭による“指導上の留意点”「○自分の好きな作品はどれなのか、その作品のどこが好きなのか、またその理由は何なのか発表し合うなかで作品の良さに気付いていくようにする。○児童の第一印象をきっかけにして、対話を広げ鑑賞を深める。○おもしろい視点で作品をとらえたり、他の作品と比較して特徴をつかんでいたりする児童を評価し、いろいろな作品の見方に気づかせる。○作品から受ける感情、聞こえてくる音、におい、そこで暮らす人々など児童の想像力をふくらませる発問をする。」等、児童の個性を尊重し、参加意欲を高める基本姿勢があった。

[9] こうした視点から、インターネットで世界の美術館にアクセスして著名な作品を居ながらにして見ることのできる利便性と、そうした通信機器では味わえない本物の作品の魅力を対置した試みも鑑賞授業の中で行われた（県立自彊高等学校）。

見て美術作品の貴重さを認識する機会にも繋がったという感想も寄せられた（栗谷小学校[10]）。

栗谷小学校では、作品の梱包作業を見学したり、作品の内側の装飾・底の銘、外箱・箱書などを鑑賞したり、工芸作品に関わる様々な事柄を体験した。

実際の授業場面では、小学生の積極的な参加態度に比べ、中学生以上は自発的な発言が少なく、消極的・受動的な参加態度で、生徒の反応が掴みにくいというやりづらさはあったが、感想文などには小学生と比較すると鑑賞体験に格段の深まりが伺われる。自己を強く意識し、社会や人生に関心を持ち始める思春期という年代に当たり、作品に込められた意味や作者の人生を自分自身に重ね合わせて、共感や感銘を覚えるのではないかと思われる。

名井萬亀の作品を鑑賞した世羅中学校では、

「人気があった時の絵が全て燃えてしまっても、絶望したり、あきらめたりすることなく、50歳からでも再び絵を描き始めてすごいと思った。」

「独学で自分なりの絵ということを研究していたので、すごいと思った。死ぬまで絵を描き続けていたのですごいなと思った。」

「本当に人の事（ビキニ水爆実験被害）で心を痛めて絵をかいた、名井さんのやさしい心がすごい。」

と熱っぽい感想を寄せている。

廿日市中学では、事前学習を含めた一連の作品鑑賞を進める際に、授業毎・鑑賞テーマ毎に生徒が感想文を書き、それを教師がプリントにまとめて生徒に返すというやりとりを繰り返すことで、自他で鑑賞の深まりや成長の跡を確認し、はにかみや口数の少なさを補って、コミュニケーションを深めていくという丁寧なフォローアップがなされていた。

難しさはあるが、この感受性豊かな年代に働きかけることの意義、近づいていって、体験させること、知らせること、見せることが大切な一歩であることを教えられた。

また、鑑賞授業を当館が学校と共同して実施したことによって、現在ではまだ未成熟な分野である鑑賞指導を各学校が進めるうえでの参考となり、自彊高校で研究授業として鑑賞授業が公開さ

[10] 栗谷小学校では、伝統工芸作家を招聘して実演・ワークショップを行う他の授業と関連付けて行われた。

れ、芸北中学校／加計高等学校芸北分校での実践が研究レポートとして教育センターへ提案された。さらに、本県東広島市において同様の取り組みが始められるなど、鑑賞教育の普及と認知において裾野を広げるきっかけとなったものと考える。

今後は、児童・生徒たちが解説に主導された鑑賞にとどまらず、自ら観察し、分析・発見し、深め、語ることができるような主体的な鑑賞態度を育てていくことが目標となる。継続的な取り組みの必要性が認識されているが、今回の試みに替わる児童・生徒にアピールのある鑑賞授業をどのように作っていくかが、各学校で課題として挙げられている。廿日市中学校では、日常的な美術情報の提供、地域の文化施設や文化財、人材、パブリックアート、伝統文化、地場産業などを活用したリアルでインパクトのある鑑賞教材を開発していくことを模索していると言う。

美術作品には作者の思想・心情・価値観などのほか、作者の生きた時代背景や地域社会など様々な情報がつまっている。美術作品を読み解く鑑賞という営みは児童・生徒の感性や知性に深く働きかけ、個性と協調性、感受性と論理性、コミュニケーション能力などの育成に繋がり、有用性の高い教材として教育上の大きな効果が期待される。今回の鑑賞授業を通して、美術作品を鑑賞するということに児童・生徒たちが敏感に反応することを確認した。児童・生徒たちは「美術作品に興味が湧いた・好きになった」「作品をじっくり見るようになった」「作者の気持ちを想像するようになった」「美術館へ行きたい」「もっとたくさんの作品を見たい」と言った。もちろん、児童・生徒の鑑賞能力は一朝一夕に育成できるものではないが、鑑賞授業を通じての美術作品との出会いが、生涯を通じて美術作品を愛好する態度への可能性となったことは大変喜ばしいことである。また、美術作品の鑑賞のみが児童・生徒の感受性を育てられるものではなく、生活全般における豊かな体験がベースになければ美術作品と響きあうことはできない[11]。こうした意欲を発展・継続させていくことを課題として、今後も美術館と学校とが連携を取りながら児童・生徒の鑑賞をサポートしていくことが求められる。

この鑑賞授業を実施するに当たっては、各開催校からは多大なる御協力をいただいた。特に担当教諭の皆様には詳細で、客観的データに裏付けられた指導案・報告書を作成していただいた。これらは大変示唆に富むもので、今後の事業展開の参考にしていきたい。ここに心から謝意を表して、報告を終了する。

（みやもとまきこ／当館主任学芸員）

---

[11] 栗谷小学校の子どもたちが見せた工芸作品への親近感も、児童の陶芸体験（釉薬の色が焼成によって変化すること等）や自然観察（木工品に使われている樹木を知っている等）、生活体験（自宅に祖父の木工用具がある等）がベースにあったからこそであろう。

広 島 県 立 美 術 館　研 究 紀 要　第 8 号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.8

発 行 日　2005年３月31日

編集・発行　広 島 県 立 美 術 館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014　広島市中区上幟町2－22
2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN
Tel.082-221-6246　Fax.082-223-1444

印　　刷　大成印刷株式会社
〒731-0138　広島市安佐南区祇園３丁目24－17
Tel.082-875-3232